

氏名(本籍)	菅野智明(福島県)		
学位の種類	博士(芸術学)		
学位記番号	博乙第2394号		
学位授与年月日	平成20年7月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	近代碑学の書論史的研究 -北碑論の展開を中心として-		
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋正彦
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	岡崎昭夫
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	中村伸夫
副査	筑波大学名誉教授		角井博

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は、主として中国清代の同治期から民国時代中期に著された碑学の理論、とりわけ北碑に焦点を当てた書論の史的展開の跡付けを目的としている。

(対象と方法)

主たる対象は、上記のように同治期～民国中期に著された北碑に言及する書論に定める他、その時期に日本で著された北碑論や、前後に接する関連書論も俎上に載せている。

本研究は二部構成からなる。第一部は、「主要北碑論にみる阮元・包世臣説の展開」と題し、北碑論の起点とされる阮・包説について、後続の主要北碑論の受容と展開の実態を探っている。取り上げた北碑論は、阮・包説(第一章)のほか、従来高く評価される康有為『広芸舟双楫』(第三章)をはじめ、沈曾植(第二章)・梁啓超(第五章)の各種北碑跋、そして康著とほぼ同時期に著された陶澐宣『稷山論書絶句』(第四章)である。

第二部は「近代北碑論の諸争点」と題し、近代の中国書論三十件余に加え、同時期の日本での書論二十件を対象に、種々の北碑論を横断的に取り上げ、以下の①～⑤のような論点別の検討を加えている。すなわち①北碑の評価根拠(第六章)、②北碑の貶斥思潮(第七章)、③南北書派区分の妥当性(第八章)、④方円の枠組や書体史における位置(第九章)、⑤所謂「蘭亭論弁」の近代的展開(第十章)といった、特に近代において議論が集中する論点について、その議論の展開を探っている。

(結果)

各北碑論の検討の結果、まず阮元説と包世臣説では、北碑の書派としての捉え方に大きな相違があり(第一章)、北派を一様に概括する阮説を継承しつつ、各北碑の多様を南派との関わりや時系列的な視座から跡付ける陶澐宣説や梁啓超説(第四・五章)に、重要な潮流を見出している。これに対し包説の北碑二大書派説を継承する康有為説(第三章)では、その書派の定立に独善的な彼の評価観が反映しており、近代北碑論の指標として絶対視することは困難との結論に達している。また、沈曾植説は、包世臣説の影響が色濃いが、陶澐宣説へ伝承される「互証」の論法を多用したことを大きな特徴としている(第二章)。

続いて、第二部の論点別の検討結果は以下のとおりである。まず北碑評価の根拠については、それが種々の類型で捉え得る多元的なものであり（第六章）、それらの評価について逐一貶斥論者との対立が加わることで、更に北碑観の多元化が進む状況を明らかにしている（第七章）。また、南北問題や方円および、書体史の問題では、地域差のほか、書写の場や、時期的変容にも目が向けられるようになり（第八・九章）、その成果が「蘭亭論弁」に顕著に結実する様を確認するに至っている（第十章）。以上により、近代北碑論は、北碑の特性や評価にかかる相と、書法史論としての相という、双方の相に亘り、多元的進展を遂げたことが導き出されている。

（考察）

以上の結果を踏まえ、本研究の結論では、こうした近代北碑論の多元的展開には、二項対立論的論法の多元化が随所で大きな影響を与えていること、その背景には、自文化中心主義から、文化相対主義、普遍主義へと移ろう論者の立場が介在しており、そのことが近代北碑論の書論史的特質として捉え得ることを指摘している。更に、これら論者の一部が早くから書法通史の視座を意識しており、近代北碑論は、南北朝書法史論として進展を見せるのみならず、書法通史論の進展に際しても大きく貢献したことを指摘し、そこに近代北碑論の意義を見出している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

近代に著された碑学の書論の研究は、従来、ごく限られた書論文献を対象とするにすぎず、その史的展開についても、一面的な見解を提起するだけに止まっていた。本研究では、こうした現状を踏まえ、対象文献の拡充に力点を置き、丹念な調査によって未刊の稿本・抄本をはじめとする稀覯文献を数多く発掘しており、まずはこの点が高く評価できる。

また、それら文献の緻密な読解と文献相互の比較検討により、旧説を大幅に是正し、この時期の碑学の書論が多元的に展開する過程を、克明に描き出している。特に先行研究が絶対視する一部の書論の位置付けを相対化させ、新たな書論の系譜を導き得た点の特筆される。

更に本研究の成果は、前近代の書論史研究のほか、碑学に属する作品研究などへの波及が見込まれるとともに、文学や絵画を中心とする美術、歴史学、金石学、文化人類学など、密接な関連が予測される各領域への還元も期待され、その汎用性を備えた主題設定も評価に値する。

本研究が対象とする書論は、性質上、題跋などの短文が多く、叙述も概して観念的である。本研究では、その客観的解釈をめざしているが、そのために論証が煩瑣になった面が見受けられる。また、筆者自身の叙述・文章表現にも改善の余地がないわけではないが、これらの点は、この研究の成果を損ねるものではない。今後の碑学派書論研究の礎となる画期的研究といえる。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。